おぎゃー献金の誕生

今から56年前の昭和39年7月1日は、東京大学分院講堂において「おぎゃー献金」第1号の献金が行われた日ということをご存知でしょうか。伊佐市（当時大口市）で産婦人科を開業していた遠矢善栄医師の念願だった「愛の運動」が全国に広がった瞬間でした。今月号では、「おぎゃー献金誕生」と「遠矢善栄医師の人生」をご紹介します。

おぎゃー献金とは

生まれながらに障がいのある子どもたちを助ける全国の産婦人科医が推進する“愛の運動”です

「健康で生まれてほしい」これから誕生する赤ちゃんへ、家族の切なる願いです。赤ちゃんの「おぎゃー」という泣声とともにこの願いは満たされます。でも、ごくわずかですが遺伝病や心身に障がいのある赤ちゃんがいます。「おぎゃー献金」は、こころと身体に障がいのある子どもたちに思いやりの手をさしのべる愛の運動です。

献金は主に日本全国の産婦人科医院・病院などを通して、公益財団法人日母おぎゃー献金基金に集められ、心身障がい児のための施設や心身障がいの予防の療育等に関する研究を補助するために使われています。

（公益財団法人日母おぎゃー献金基金 HP より）

実績

出産されたお母さまやそのご家族、出産に立ち会った産婦人科医、助産師、看護師、そして献金運動の趣旨に賛同していただいた企業や一般の方々の善意に支えられています。

令和元年度までに寄せられた総額約 62 億円の献金は、障がい児施設への助成（延べ 1,286 施設）、心身障がいの予防・療育、先天異常の研究（延べ 804）の機関に贈呈され、子どもたちのために活用されています。

現在、遠矢医院跡地には、おぎゃー献金記念堂と子ども交流支援センター 笑（すまいる）が整備されています。また遠矢医師の没後 17 年忌およびおぎゃー献金 45 周年を迎えたことを記念する「記念碑」が、遺族・鹿児島県産婦人科医会・関係者によって建設されました。

平成 30 年 10 月には、市制 10 周年記念事業おぎゃー献金合奏団コンサートも開催されるなど、伊佐市は**おぎゃー献金発祥の地**として広く認知され、遠矢医師の崇高な精神がいまも息づいています。

献金の方法

1. 産婦人科の病院やクリニック、こども課（大口庁舎）に設置されている献金箱へ献金
2. 郵便振替用紙で献金
3. クレジットカードで献金
4. その他の方法

協力企業の協力により、対象商品をご購入いただくことで売上げの一部がおぎゃー献金基金に寄付されます。

※献金方法など詳細は、公益財団法人日母おぎゃー献金基金のホームページをご覧いただくか、直接ご連絡ください。

※全国から寄せられた献金は、堅実な運営と、厳正な審査を行っています。伊佐市には、平成 23 年 2 月に開所した「子ども交流支援センター 笑（すまいる）」の施設整備費として、おぎゃー献金基金から 1,000 万円をご寄附いただきました。

おぎゃー献金
公益財団法人
日母おぎゃー献金基金
〒１６２−０８４４　東京都新宿区市谷八幡町 14 番地　市ヶ谷中央ビル内
☎０３・３２６９・４７８７　FAX ０３・３２６９・４７３０
E-mail　kikin1964@ogyaa.or.jp

遠矢善栄

とおやよしえ

人生の目標

「ようやく産婦人科医になれました」善栄は心の中で叫びました。そして、静かに目を閉じ、幼い日の母との悲しい別れを思い返しました。

それは、遠矢善栄が8歳のときで、ちょうどあの桜島が、大正の大爆発を起こして間もない頃のことです。5人目の子どもを出産しようとしていた善栄の母は、出血多量がもとで亡くなってしまったのです。善栄が寝ている間の夜中の出来事でした。朝起きてみると、辺り一面に香のにおいが立ちこめ、顔に白布がかかった母の姿を見たときの衝撃を、善栄は生涯忘れることはありませんでした。そして、その深い悲しみの中で、「将来、何が何でも産婦人科医になるぞ」と心に強く誓い、一日でも早く立派な産婦人科医になって、母のような悲劇をなくし、多くの親子に幸せを届けたいと思うようになったのです。

産婦人科医として一人立ちし、東京で開業した善栄は、日々熱心に診療に努め、寸暇を惜しんで研究に励みました。しかし、1944年（昭和19年）の頃になると、東京は日夜激しい空襲にさらされ、医療活動も困難を極めるようになりました。

このような中、善栄は思い切って、当時妻が疎開していた大口市（現伊佐市大口）へ引っ越す決意をしたのです。

大口市での開業

1945年（昭和20年）大口の産婦人科医として、善栄の新たな生活がスタートしました。慣れない土地での医療活動は、思い通りにいかないことが多く、太平洋戦争後の混乱もあって何をするにも大変な苦労をともないました。それでも、常に患者さんの立場で熱心に医療を施す善栄を、地域の人々は、温かく受け入れてくれるようになりました。

このような苦労の中で、善栄は、医師として見過ごしてきた弱い立場の人々、特に障がいのある人について、深く考えるようになったのです。

産婦人科医が関わる出産の中では、多くの幸せな出産がある一方で、仮死状態で生まれ、脳細胞の酸素欠乏が原因で、障がい者としての運命をたどらなければならない子どもたちもいるのです。善栄自身も自ら手がけた出産で、難産の末、母子ともに生命は無事に救うことができたものの、子どもに同様の障がいを残すという忘れられない経験もありました。

「このような恵まれない多くの人々のために何かしてやりたい……」「自分に一体何ができるのか……」善栄の心の中では迷い悩む苦しい日々が続きました。

1906年（明治39年）、日置郡伊作町（吹上）生まれ。東京で医師として働いたのち、1945年（昭和20年）伊佐市（大口）に移り、産婦人科医院を開業。1993年（平成5年）、86歳で生涯を終えました。

三姉妹との出会い

1963年（昭和38年）善栄は、心の整理がつかないまま、家族6人の中に重度の障がいのある子どもが3人もいるという近所のお宅を訪ねて、その生活の様子を自分の目でしっかり確かめることにしたのです。

三姉妹の不自由な身体の動きや、困難な食事の様子から、母親の日々の介助がどれだけ厳しく大変なことであるか、よく理解できたのでした。

当時、重度の障がい児に限らず、軽度や中程度の障がいのある子どもたちとその家庭の多くの人々が、精神的にも肉体的にも経済的にも、苦しい孤独な闘いを強いられているということが徐々にわかってきました。善栄の焦りは増していくばかりです。

ところが、三姉妹の母親は、この子らを恥ずかしいと思って世間から隠そうとしたり、家に閉じ込めようとしたりするようなことなどは一切せず、いつも堂々としていて、子どもたちのために精一杯明るく強く生きようとしているのです。この姿を見た善栄は、「これが真の母親なのだ」と心から感動し、子どもたちを療育することの大切さをことさら強く感じたのです。

悩みぬいた末、善栄は次のような思いにたどりつきました。それは、「この子どもたちを治療・看護するための施設を整備・充実して、より良い環境の中で生活できるようにしたい」「できるだけ多くの人々の理解と援助によって、救済の道が開けるように働きかけていきたい」という考えでした。そのために、善栄は、福祉事務所を中心にした多くの人々の支援の輪を広げながら、障がい児を救済するための運動を粘り強く展開していきました。

いつしか善栄の切実な思いは、報道機関の積極的な働きもあって、広く全国の人々の関心を呼ぶようになりました。

「おぎゃー献金」の誕生

1963年（昭和38年）鹿児島市で開催されることになっていた、日本母性保護医協会（産婦人科医の会）鹿児島県支部の総会で、善栄は、かねてから思い描き、心に温めてきた考えを提案することにしました。

それは、「健康な赤ちゃんを授かった産婦さんにお願いします。どうか、その喜び、その幸せの千万分の一にもたりない金十円也を、障がい児に、そして、その家庭に分かち与えてください」という内容のものでした。つまり、健康な赤ちゃんを出産した母親や出産に立ち会った医師らの寄付を、障がいのある子どもたちの支援に役立てることを提案したのです。

この善栄の提案は、満場一致で可決され、日本母性保護医協会が全国的にすすめる決定をしたことで「おぎゃー献金」としてうぶ声をあげました。

その後、多くの人々の熱意と協力によって着実に発展していきました。

寄付金額については「もう少し金額を上げてもいいのではないか」という意見もありましたが、少しでも多くの人の善意を届けることが善栄の思いでした。こうして献金箱が各地の産婦人科に置かれ、集まった寄付金は、障がい児の施設や研究機関など延べ二千か所以上に届けられました。これまでに多くの子どもたちの救済に役立っているそうです。また、この運動は、寄付金を集めるだけでなく障がい者に対する人々の意識を変え、国の働きを促し、差別や偏見を解消する大きな力にもなったのです。

善栄は、1993年（平成5年）86歳の生涯を終えました。「多くの子どもたちとその家庭に光を当て、みんなの力で幸せにしてあげたい」という善栄の一念は、ここに見事に花開き、その意志は今日に受け継がれているのです。

『郷土伊佐の発展に尽くした 郷土の先人たち』より
伊佐市教育委員会発行

昭和39年7月1日
おぎゃー献金全国運動発足

おぎゃー献金ホールでのスイングあそびで笑顔いっぱい

あっぱれ！伊佐成（イサモリ） Vol. 5

子ども発達支援センター

たんぽぽ

安心して子育てができるまちをめざして

おぎゃー献金発祥地である伊佐の子育て支援について、子ども発達支援センター「たんぽぽ」の堀ノ内真理子園長にお話を伺いました。

「たんぽぽ」は、人との関りが苦手、少し落ち着きがないなど、発達に不安を感じる就学前の乳幼児とその親の子育てを応援する施設として平成9年に開設され、現在47人の子どもたちが元気に通っています。「たんぽぽ」の活動には、大切にしている3本の柱があります。

まず、一人ひとりと丁寧に向き合う「発達支援」です。専門的な知識を持つスタッフが、子どもの発達段階や個性などに応じた「遊び」を通して、運動・言葉・社会性の発育を促しています。

次に、「家族支援」です。育児に不安を抱える保護者は多くいらっしゃいます。同じような悩みを持った保護者との交流会や、専門スタッフに相談しやすい環境づくりに取り組み、家族の不安や孤独感を軽減できるように努めています。

最後に、「地域支援」です。伊佐市では、保健師が中心となり、保健・教育・保育・医療・行政の職員が密に連携しています。多方面からのサポートによって、地域全体の子育て支援体制の充実に繋がっています。

堀ノ内園長は、「乳幼児期は人格を形成する重要な時期ですので、早期から成長をサポートすることがとても大切です。集団での生活・遊びを通して子どもの自己肯定感を育み〝生きる土台〟をつくることで、その子と保護者が笑顔がいっぱいになることをめざしています」と話します。

卒園した子どもたちとその保護者を就学後も地域で支援できるよう、伊佐に特別支援学校を誘致する活動にも力を入れています。

「日本一子育てにやさしいまち」を目標に掲げる伊佐の取組みは、子どもと保護者に寄り添うスタッフの情熱と努力によって支えられています。

▲みんなでお誕生日会

▲たんぽぽスタッフのみなさん